

資料紹介

常民文化研究 第二卷(101111)

第二次東南アジア稲作民族文化総合調査(一九五七)

高城 玲

五八年)に関連する民族学振興会資料について

——「趣意書」と「事業実績報告書」——

はじめに

本稿は、神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)に保管されている「民族学振興会資料」(以下、振興会資料)のなかで、「第一次東南アジア稲作民族文化総合調査(一九五七～五八年)」(以下、第一次東南アジア稲作調査)に関連する文書資料の一部を書き起こし、紹介することを目的としている。

まず「民族学振興会資料と第一次東南アジア稲作民族文化総合調査(一九五七～五八年)の概要」で、振興会資料と第一次東南アジア稲作調査の概要を確認する。その上で二「『東南アジアの稲作民族文化の総合調査趣意書』一九五七年三月(民族学振興会資料65-5)」では、当時の日本民族学協会が主導した大規模な海外調査計画である第一次東南アジア稲作調査「趣意書」を書き起こして紹介する。続く三「『事業実績報告書』一九五八年四月(民族学振興会資

料65-2)」では、同調査直後にまとめられた手書きの「実績報告書」を同様に書き起こし、広く利用可能な資料とする。二と三の「趣意書」と「実績報告書」は事務的な文書資料であるが、調査全体の計画時と終了直後の概略について、主体となった当事者自身がコンパクトにまとめた全体を把握しやすい資料となっている。本稿では、多岐にわたる振興会資料に含まれている東南アジア稲作調査関連文書資料のなかで、まずは上記の二つの資料に限定して書き起こし、最後の四「『趣意書』と『実績報告書』の注目点」で注目点をいくつか列挙する。

本稿での資料紹介を通して、振興会資料の文書内容の一端と、戦後の復興途上にあった当時の日本において学会主導で大規模に行った海外調査である第一次東南アジア稲作調査について、今後の更なる調査研究に資する一助としたい。なお、第一次東南アジア稲作調査に関連する振興会資料には本稿で紹介する二つの資料以外にも、現地での収集品目録やより詳細な調査日程に関する資料などを含め

た多岐にわたる文書資料が含まれているが、それらについては紙幅の関係で今回は紹介を見送る。別稿の機会を期したい。

一 民族学振興会資料と第二次東南アジア稲作民族文化総合調査(一九五七～五八年)の概要

具体的な資料紹介の前に、振興会資料と第一次東南アジア稲作調査の概要を確認しておきたい。

民族学振興会資料

財団法人民族学振興会(一九六四(昭和三九)年～一九九九年(平成一二)年)は、その前身を一九三四(昭和九)年の日本民族学会の設立まで遡ることができる。戦前の日本民族学会は、渋沢敬三の支援などによって財団としての機能も備えていたが、一九四二(昭和一七)年に文部省民族研究所の設立が決定されたことを受け、同年から日本民族学会は財団法人民族学協会に改組された。¹⁾この財団は、戦後に財団法人日本民族学協会と名称を改め、一九六四(昭和三九)年まで継続する。²⁾この間、戦後の混乱期を経て、全国各地の大学にも文化人類学・社会人類学の専門講座などが開設されたことなどを背景とし、一九六四年には学会が財団法人日本民族学協会から日本民族学会として再度独立した。同時に協会の財団機能が民族学振興会として改組され、学会との連携の下に、一九九九年(平成一一)年の解散まで存続した。³⁾学会は、二〇〇四(平成一六)年の日本文化人

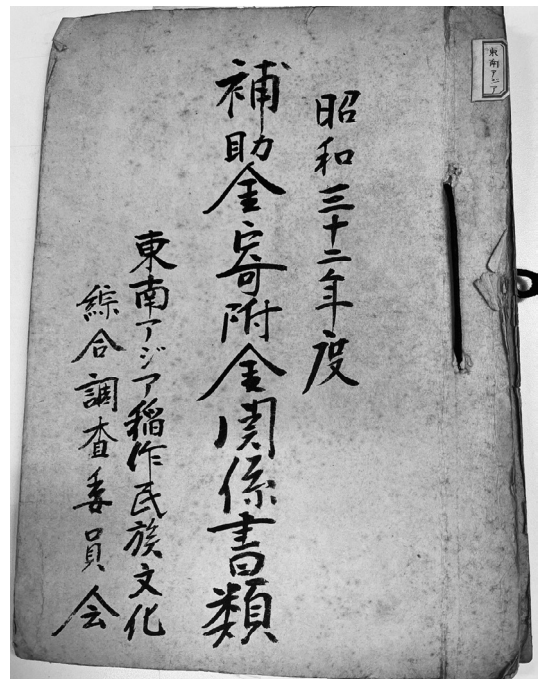


図1 東南アジア稲作民族文化総合調査に関連する民族学振興会資料の一部

類学会への名称変更を経て、現在に至っている。

振興会資料には、一九三四年の日本民族学会設立以前から、解散時の一九九九年までの長きにわたる財団と学会の運営に関わる文書資料が含まれている。文書資料のほかに蔵書なども含まれ、それら文書資料と蔵書は、民族学振興会の解散にあたり、渋沢敬三によるアチックミューゼアムの後継機関でもある常民研に寄贈されるに至っている。⁴⁾本稿で紹介するのは、この振興会資料における文書資料の一部である(図1参照)。

振興会資料の文書資料について、常民研を拠点とする国際常民文

化研究機構の共同研究で調査を進めた泉水によれば、文書資料は計二四五一点で、最も古いものは一九二五（大正一四）年に遡り、戦前の民族学会時代のものが五五点、民族学協会時代の一九四二年から一九四五年までのものが一四三点、戦後から一九六四年までのものが九四九点、残る一三〇〇点が一九六四年以降の民族学振興会時代のものであるとしている〔泉水 2015: 267〕。本稿で紹介する第一次東南アジア稲作調査に關連する振興会資料は、日本民族学協会時代の戦後から一九六四年までの九四九点の中に含まれる。

現在、常民研に所蔵されている振興会資料の文書資料は、寄贈された文書を撮影したマイクロリールに加えて、それを複写した簡易製本冊子としても保管されている。⁽⁵⁾ 常民研では文書資料の整理を進め、番号を付して、個別に標題、作成者、宛名、年代、原形、現在の形態・破損状況等、縦法量、横法量、備考が記された目録を作成してきた。資料の基礎的整理を進めてきた一方で、文書内容として法律上慎重な扱いをすべき文書が少なく、紹介や公開には時間も要してきた。そうした状況の中で、振興会資料に含まれていた第二次大戦中の著名な民族学者による民族学研究講座を翻刻するなど、二〇〇九年以降、資料の公開や研究を進めたのが、泉水を代表とする国際常民文化研究機構の共同研究だった〔神奈川大学国際常民文化研究機構編 2013, 2015〕。本稿の資料紹介は、これまでの振興会資料の整理と公開、研究を背景になされるものである。

ここで紹介する振興会資料も、紹介や公開に際しては慎重な検討の上で、一九五〇年代に大規模に組織された第一次東南アジア稲作

調査の学術的側面の価値を重視するとともに、まずは「趣意書」と「事業実績報告書」という当時対外的にも報告されていた資料を優先して書き起こしすることとした。

第一次東南アジア稲作民族文化総合調査（一九五七～五八年）

本稿で關連文書資料を紹介する第一次東南アジア稲作調査は、一九五四年に学会設立から二〇周年をむかえた日本民族学協会が企画した記念事業の総合調査である。当時の日本民族学協会は、会長が渋谷敬三、理事長が岡正雄で、その下に東南アジア稲作民族文化総合調査委員会が組織された。⁽⁶⁾

第一次調査の対象地域は、東南アジア大陸部のメコン川流域を中心とするタイ、ラオス、カンボジア、ベトナムを予定していたが、ベトナムに關しては、政情不安とビザ取得に時間を要したため、調査は一部しか行われなかった。第一次調査本隊の調査期間は、一九五七（昭和三二）年八月二八日に日本を出発してから、一九五八（昭和二三）年三月末に帰国までの約七か月間にわたり、一部は残留して四月末まで調査を続けた。⁽⁷⁾

第一次調査の参加者は、二の資料紹介で詳述するが、松本信広を団長とし、農学班の浜田秀男、長重九、言語学班の浅井恵倫、民族学班の河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄、考古・歴史学班の松本信広、清水潤三、江坂輝弥、技術文化班の八幡一郎の計一〇名だった。このほか、現地から医師の和田格と当時外務省留学生だった石井米雄が参加し、後援した読売新聞社から報道・写真・映画班として五名

が加わっている。運転手や通訳を加えると総勢二〇名程にもなり、戦後に学会が主導しておこなった海外学術調査としては当時最大規模であった。⁽⁸⁾

その後は第一次調査に続き、一九六〇(昭和三五)年にインドネシアを主たる対象とする第二次調査、一九六三(昭和三八)年から翌六四(昭和三九)年にはインドやネパールへの第三次調査が行われているが、本稿の対象は第一次調査に限定する。

第一次調査の主な成果としては、松本信広編『1965』『インドシナ研究——東南アジア稲作民族文化総合調査報告(1)』有隣堂が刊行されたほか、一般向けの書物として、東南アジア稲作民族文化総合調査団編『1959』『メロン紀行——民族の源流をたずねて』読売新聞社も出版された。ほかに、一九五八、五九年刊行の『民族学研究』二二(三三)、二三(三四)には「東南アジア稲作民族文化総合調査座談会」が二回にわたって掲載され、個別の論文も様々な媒体で発表されている。さらに、第一次東南アジア稲作調査団の特筆される一般向けの成果として、「日本人の源流を探る——東南アジア民族文化展」が一九五八(昭和二三)年六月三日から八日まで日本橋白木屋で開催されたほか、同行した読売新聞の映画班による『民族の河メコン——日本民族の源流を探る』という映画の一般公開などが挙げられる。⁽⁹⁾

資料書き起こしにあたっての原則

以下資料の書き起こしにあたっては、(1)原文の歴史的仮名遣いや

カタカナ表記の地名や人名、文書によって異字体がある場合は原文のままとした(但し、数字の旧字体と再読文字については常用漢字に改めた)こと、(2)原文の誤記と思われるところは「ママ」と追記したこと、(3)判読不明文字は□で示したこと、(4)住所や個人情報と思われる箇所は割愛し○と表記したことなどの原則に沿っている。特に現地の地名、民族名、人名などの固有名詞表記がカタカナ、ローマ字など個別資料ごとに混在し、表記にも揺れが見られるが、表記の統一をせずに原文のままとしている。それらについては、今後、各地域や分野の専門家によって分析の対象とされるべく、ここでは原資料の紹介と書き起こしにとどめた。

二 「東南アジアの稲作民族文化の総合調査趣意書」一九五七年三月(民族学振興会資料 65-5)

ここで紹介する「東南アジアの稲作民族文化の総合調査趣意書」(民族学振興会資料65-5)は、簡易冊子となっており、国や関連機関など対外的に計画概要を説明するために作成されたものと考えられる。なお、中に含まれる「趣意書」、「事業計画」、「調査委員会名簿」「予算」などに関してはほぼ同じ内容ながら個別の別資料があり、内容も一部異なっているものや、冊子化以前の草稿的な位置づけと考えられるものもいくつか存在している。

更に、資料65-5に関連して、その一部を翻訳したSynthetic Re-

search Plan of Cultures of Southeast Asian Countries: Program of Rice Culture Studies と題する英訳版と、*Plan de la recherche syn-thétique sur la civilisation des pays de l'Asie du sud-est: programme de l'étude sur la civilisation des peuples cultivateurs du riz* と題する仏訳版が存在している。

加えて、資料65-5と内容が重なる別資料として「東南アジア稲作民族文化綜合調査後援会趣意書」一九五七年六月（民族學振興會資料87-1）も存在している。この「後援会趣意書」は、日本民族學協會内に東南アジア稲作民族文化綜合調査後援會を設け、企業や個人からの寄付を募るため、事業計画の概要を説明する用途で作成されたものと考えられる。⁽¹⁰⁾ 内容は資料65-5と重なる部分が多いが、「後援会趣意書」には洪沢敬三を後援會長とする「後援會」世話人名簿と、より詳細な「収支予算」が付されていることが異なっている。逆に、「後援会趣意書」には資料65-5に記載がある「諸外国の調査研究活動の概況」が省略されている。本稿では、學術的な背景に重点を置く観点から、資料65-5の「趣意書」を以下に紹介する。

東南アジアの稲作民族文化の綜合調査趣意書

1. 東南アジア稲作民族文化綜合調査委員會
2. 趣旨
3. 計画概要
4. 諸外国の調査研究活動の概況
5. 調査行程（附要図）
6. 所要經費

財団法人日本民族學協會

東南アジア稲作民族文化綜合調査委員會

昭和三二年三月（一九五七）

財団法人日本民族學協會

財団法人日本民族學協會は、日本民族學會として昭和九年創設され、昭和一七年度省民族研究所の設置に伴い、財団法人日本民族學協會と名を改め研究所の外郭団体として新たに発足し、研究所の調査研究を補い、表裏して外地調査を遂行し、民族言語の若い専門家の養成に努めた。戦後、民族研究所の廃止に伴い、研究所の従来の研究活動の面をも継承し、研究機関であると同時にまた全国の専門家を網羅する全国単一學會の性格をも併具し、対外的にも斯学の単一代表機関である。協會のメンバーとしては純粹民族學者のみな

(13)
協会役員

機関誌 「民族学研究」(季刊)
附属博物館 民族学博物館

会長	洪沢敬三	
理事長	岡正雄	
理事	松本信広	浅井恵倫
	八幡一郎	宮本延人
	関敬吾	馬淵東一
	西村朝日太郎	石田英一郎
	須田昭義	宮本馨太郎
	小林高四郎	古野清人
	岩村忍	小山栄三
	犬飼哲夫	丸川仁夫
	泉靖一	鈴木二郎
	江上波夫	桜田勝徳

らず、言語学者・歴史学者・先史学者・地理学者・農学者で民族学に関心を有し、この学問の重要性を認識する学者は殆んどすべて協会に所属し、協同して協会の研究運営にあたっている。
所在地 東京都北多摩郡保谷町〇〇(電話 〇〇番)
東京連絡所 東京都〇〇〇 岡正雄方(電話 〇〇番)

1. 東南アジア稲作民族文化総合調査委員会 (民協：日本民族学協会の略)

委員長	岡正雄	民協 東京都立大学	理事長 教授
幹事	馬淵東一	民協 東京都立大学	理事 教授
〃	白鳥芳郎	民協 上智大学	評議員 教授
〃	河部利夫	民協 東京外国語大学	評議員 教授
〃	松本信広	民協 慶応義塾大学	理事 教授
〃	浅井恵倫	民協 金沢大学	理事 教授
〃	八幡一郎	民協 東京大学	講師
〃	関敬吾	民協 東京学芸大学	理事 教授
〃	宮本延人	民協 慶応義塾大学	理事 講師
〃	西村朝日太郎	民協 早稲田大学	理事 教授
〃	山本達郎	民協 東京大学	評議員 教授
〃	蒲生礼一	民協 東京外国語大学	評議員 教授
委員	古野清人	民協 北九州大学	理事 学長
〃	岩村忍	民協 京都大学	理事 教授
〃	牧野巽	民協 東京大学	評議員 教授
〃	盛永俊太郎	農林省 農業試験所	所長
〃	今西錦司	民協 京都大学	評議員 講師
〃	浜田秀男	民協 兵庫農科大学	会員 教授
〃	岩田慶治	民協 大阪市立大学	評議員 助教授
〃	須田昭義	民協 東京大学	理事 助教授
〃	川喜田二郎	民協 大阪市立大学	評議員 助教授
〃	井筒俊彦	民協 慶応義塾大学	会員 教授
〃	田辺寿利	民協 東北大学	評議員 教授
〃	米林富男	民協 東洋大学	会員 教授
〃	佐島敬愛	民協 国際商業会議所	評議員 事務局長

調査隊員候補者

（タイ班）

古野清人	北九州大学学長	民族学
長重九	農林省農業技術研究所員	農学
八幡一郎	東京大学講師	考古学・技術文化
白鳥芳郎	上智大学教授	歴史・民族学
河部利夫	東京外国語大学教授	歴史・民族学
岩田慶治	大阪市立大学助教授	民族学
大瀬貴光	福井衛生試験所員	熱帯医学
三根谷徹	東京大学助教授	言語学
桜井清彦	早稲田大学講師	地理学
綾部恒雄	東京都立大学大学院	民族学

（カンボジア班）

浅井恵倫	金沢大学教授	言語学
松本信広	慶応義塾大学教授	歴史・民族学
山本達郎	東京大学教授	歴史・民族学
浜田秀男	兵庫農大教授	農学
馬淵東一	東京都立大学教授	民族学
井筒俊彦	慶應大学教授	言語学
小浜基次	大阪大学教授	人類学・医学
清水潤三	慶應大学助教授	考古学
和田久徳	お茶の水大助教授	歴史学
大林太良	東京大学助手	民族学
北原真智子	東京都立大学修士	民族学
金山好男	東京大学大学院	歴史学
酒井良樹	東京大学大学院	歴史学

（以上のうちより各班ごとに6～7名をえらぶ）⁽¹⁴⁾

2. 趣旨

（1）今日東南アジアは、政治的、経済的に益々重要性を加えつつあるのみならず、学術的にも極めて大きな関心の焦点となっている。然るにこの地域については若干の問題と地方を除いて、従来殆ど基本調査が行われていなかったといっても過言ではない。他方に於いて既往の欧米学者の研究は、概して夫々の植民地の個別研究に止まるものや、特殊の興味に偏向するもの多く、東南アジアに関する総合的考察に於いて充分でなかったことは否定しがたい。

東南アジア諸民族の生活諸相は、歴史的にも現実的にも、稲作農耕によって本質的に規定せられ、そこに生起する文化的、政治的、

経済的諸現象並に近代化の諸動向に関する理解もかかる基盤構造の把握なくては到底不可能である。一方同じく稲作農耕が日本民族文化を基本的に特徴づけていることは贅言を要しないところであるが、その日本民族文化の源流並に性格は正に東南アジア研究の成果と照し合せて始めてこれを解明し得ると共に、日本民族との関連に於いて広く東南アジア稲作諸民族の間に見られる親近性・共通性および特殊性もこの種の総合的研究を通じてのみこれを充分に理解し得ると考えられる。

日本民族学協会は、一九五四年より東南アジア稲作文化をめぐる綜合調査を日本民族学界の緊急かつ重要な課題として、数カ年に亘りこの問題に向かって努力を集中することに決し、自然科学・文化（社会）科学両面に亘る専門学者の協同によって、東南アジア諸民族（フィリッピン・インドネシア・マライ・タイ・ラオス・カンボジア・ヴェトナム・ビルマ・インド・パキスタン・セイロン）の基本的文化構造・歴史的系統的関係を究明し、併せて近代化諸問題をも研究の対象とする計画をたてまず第一次調査地域として、タイとカンボジア・南ヴェトナム・ラオスとを選んだ。

（2）東南アジアの民族学的実態調査の緊急性

（イ）東南アジアは今日国際的にもまた日本にとっても政治的・

経済的に重要な意義をもつにいたった。緊急重要な問題が継起し、またこの地域の近代化は焦眉の問題となっている。

これに対処するためには、単に日々に変動展開する現象的な問題の調査研究に止まらず、この動的な現象の生起する地盤たる民族の伝統・社会的経済的文化的の基本構造を急速に調査しなければならない。

(ロ) カンボジアに対する移民の問題は重要な懸案となっている。これがためには日本人移民適応の問題を解決する必要がある、したがって速やかにカンボジアの民族学的調査を行い、社会的文化的生活環境を明確にすることが要請される。

(ハ) わが国の学問、特に東亜民族学・東亜言語学・東亜先史学或いはまた日本民族文化の研究は、最速東南アジアの実態的調査研究なくしては充分な発展を期待し得なくなった。東南アジアの実態調査は学界多年の要望であり、かつ今日緊急の課題となっている。速やかにこの行きづまりを打開したい。

(ニ) 戦後特にアメリカはその東南アジア政策に即応して東南アジアの各地に民族研究のセンターを設置して、幾多の学者を交替で派遣し、実態研究を進めており、その他欧州諸国の調査活動にも注目すべきものがある。日本学界としても速やかにこの地域の研究に着手し、日本学界の最も重要かつ有望な研究地域として確保したい。

(ホ) 民族学的・言語学的研究は特に実態調査を前提とし、また一朝一夕に効果を挙げる事が出来ない。専門学者の養成には多

年を要しかつ実態調査の機会を与えなければならない。しかるに我国に於いてはこの地域の専門学者の数は他の分野に比して比較的少ない。また既存の東南アジア研究の諸機関（台北帝大、文部省民族研究所、東亜研究所、満鉄東亜経済調査局等）は終戦と共に解体消滅し、以来東南アジアの組織的研究は停頓の状態にある。急速に若い学徒を育成し、斯学のためのみならず、広く我国の東南アジア理解と学術的提携に役立てる必要があると信ずる。欧米語または欧米語文献のみを媒介とする東南アジア研究には限界があり、徹底を期し得ない。民族学的実態把握と民族語の修得によって初めて充分の効果を期待し得るであろう。

3. 計画概要

(1) 時期

タイとカンボジアとを昭和三二年九月より昭和三三年六月にいたる一〇ヶ月間調査する。

(2) 班編成

調査隊はカンボジア班とタイ班とに分れる。カンボジア班は調査の末期にヴェトナム、ラオスに赴き、カンボジアおよびタイとの関係を調査すると共に将来のための予備調査を行う。

各班は民族学者二名、言語学者一名、歴史考古学者一名、農学者一名、および助手二名のこの地域の専門学者をもって構成する。

（3）この地域の意義

（イ）この地域は東南アジアの他の地域に比し、民族學的研究は進んでいない。しかも東南アジアの中心的地域で東南アジアの文化的・社会的性格が最も強くあらわれており、また日本民族の研究にとり極めて重要な地域である。

（ロ）この地域は、太平洋諸地域（日本を含む）へ拡大分散した諸民族並に諸文化潮流の揺籃の地であり、また出発点であったと推定されている。

（ハ）この地域は、種々な民族系統が錯綜し、民族文化の諸類型が見られる。農村の諸形態が交錯し、段階・水準を異にする種々な社会・経済状態が併存し、外来高度文化に対する受容の様相、仕方は必ずしも同じでない。近代化の在り方も極めて複雑である。

（ニ）この地域、特にカンボジアは印度および南シナと共に稲の原生地帯として問題となっていて、稲作農耕およびこれに伴伴する諸文化にとり極めて重要である。

（ホ）この地域には、稲作その他の農耕技術の種々な段階が併存し、農耕一般の問題にとり重要な地域である。

（ヘ）東南アジアのこの地域にとって、メーコン川は歴史的に、文化的に、経済的に決定的な意義をもっていた。今後メーコン川の重要性は再認識されるにちがいない。

（ト）この地域は、日本民族或は日本稲作文化の系統・源流の究明にとり極めて重要な意義をもち、南シナ並にこの地域の研究の成果を俟たずしてこの問題は開明されないであらう。

（チ）この地域は、中国・印度の文明が交錯し、東亜文明の歴史的研究にとりて重要である。

（リ）この地域の近代化の問題は、緊急事項となっている。この問題の究明のために諸民族の文化的・社会的・経済的・政治的基盤構造を速やかに明らかにしなくてはならない。

（ヌ）日本人移民の適応問題に関し、急速にカンボジアの文化・社会・経済の基本構造を明らかにする必要がある。

（ル）これら東南アジア地域にはまだ欧米の研究が他の地域に比し十分に根を下ろしていない。日本學者の研究領域としては是非調査をすすめる必要がある。

（ヲ）この両地域は、連関錯綜し、同時に一体として調査を行うことが最も効果的で必要である。

（4）研究事項

（イ）諸民族および数地域の生活実態をインテンシブに綜合的に調査する。成果を夫々モノグラフとしてまとめる。

（ロ）比較研究によって、次の如き問題に対し研究を方向づけ、成果を個別的問題研究としてまとめる。

- (a) 稲の農學的系統研究
- (b) 農耕技術の比較研究（灌漑・道具を含む）
- (c) 稲作農耕を中心とする神話・宗教儀禮の研究
- (d) 稲作民族の社会・經濟構造の研究
- (e) 考古學的研究

- (f) 言語学的研究
- (g) 日本民族ないし稲作文化と系統的關係の研究
- (h) 民族・種族の分布・系統の研究
- (i) 近代化の問題の研究(都市化の問題、文化受容・変動の問題、封建遺制の問題等々)
- (j) 日本人移民の適応の問題の研究
- (ハ) 映画・写真・録音による記録の作成

4. 諸外国の調査研究活動の概況

(1) タイ地域

従来、タイ国における民族文化についての中心的研究調査機関は「シヤム学会」(Siam Society)であって、タイ人の他に欧米人も参加し一九〇四年以来「シヤム学会誌」(Journal of the Siam Society)を発行している。その内容は、文献・歴史学的研究や仏教に関する論文が主で民族学的社会学的研究は乏しい。民族学的研究は主として在タイ、デンマーク人のザイデンファーデン(E. Seidenfaden)を主となされ、その研究は若干の種族研究或は特殊の問題に限られていて、その方法も旧套を脱していないが、注目・参考とすべきものである。この他言語学、民俗学分野ではターニ・ニワット(Than Niwat)言語学ではシワサリヤーナ(Siwasuriyana)歴史学・民俗学ではピア・アヌマン・ラーチャトン(Piya Anuman Rachathon)などが若干の論文を発表している。

第二次大戦前の実態調査研究はドッド(W. C. Dodd)のタイ種族

の研究、シンバーマン(C. C. Zimmerman)の農村経済調査(一九三〇〜三一年)、『アンドリューズ(J. M. Andrews)の第二次農村経済調査(一九三四〜五年)』、『クレードナー(W. C. Credner)のタイ諸種族の研究などが比較的すぐれているが、やはり多くの欠陥を免れない。最近において注目されるのは、一九五二年以来米国コーネル大学がSoutheast Asia Programにもとづいて、研究センターをバンコックにもうけ、研究者を相ついで派遣し、村落調査等を行っていることである。その成果はすでに『シャープ(L. Sharp)等のSiamese Rice Village: A preliminary study of Bang Chan, 1948〜49 (1953)』としてあらわれている。方法も新しく参考とすべき点も多いが、まだ調査研究のはじめで、概説的な傾向をまぬがれない。

タイ人学者のものとしては、前記ピア・アヌマン・ラーチャトンの『The life of the farmer in Thailand (一九四八、英訳一九五五、ヘール大学刊)』が同じく概説的ではあるが参考となろう。

なお国内諸族の研究として、昨年シカゴのField Museumの実態調査がある。

現在タイ国において、実態調査上連絡すべき研究機関としては下記のものあげられる。

タイ王立研究所、シヤム学会、チュラロンコン大学、文政大学、農科大学、国家統計院、国立図書館、農林省その他の諸官庁。⁽¹⁵⁾

(2) カンボジア地域

インドシナ・モイ族居住地域の調査は十九世紀末より仏人によっ

て行われた。其中目ぼしいのはデュッダル・ド・ラグレ (Doudart de Lagrée) の一八六六年より八年に亘るメーコン流域の調査であり、彼の死後はフランシス・ガルニエ (Francis Garnier) によって受けつがれた。一八八〇年にはネイ (P. Neis) のバリア地方トラオ族の調査、一八八二年にはゴーチエ (A. Gautier) のドンナイ流域をさかのぼる奥地探検が行われたが、一八九〇年より九一年に亘るパヴィー (Pavie) の第二回遠征は、極めて大仕掛の調査であり、その成果は七巻の大冊となつてこの未知の地域を世人に紹介した。一八九二年より九四年にはエルサン (Yersin) によって、ラーデ族最初の調査がなされ、一九〇〇年にはラヴァレー (Lavallée) 之をつぎ、一九〇四年にはポール・パッテ (Paul Patte) がソンベ川の流域をさかのぼり、ドンナイ川の上流に出で、此奥地のモイ族について調査したが、同年にかつてのミッション・パヴィーの参加者オダンダル (Odendhal) は、ジャライ族の調査に際し、その巫術王のため生命を奪われている。アンリ・メートル (Henri Maitre) は、此ジャングル地帯の探検に一生を捧げ、殊に一九〇九年のミッションの報告は、吾々に教える所頗る多いが、彼も亦一九一四年ムノン族の爲殺された。此等の探検家と相並んで蛮地に身を挺して布教した宣教師達の功績も忘れ難い。即ちバナル族に対し、デュリスプール師 (Dourisboure) 、スチアン族に対し、アゼマル師 (Azemar) 、ジャライ族に対するゲルラク師 (Guerlach) など貴重な資料を記録しているが、その外永年の在留者サバチエ (Sabatier) はラーデ族のフクロア、慣習法に就て、ギルシネ (M. P. Guilleminet) はバナル

族の言語と慣習法に、ジェルフェル (M. Gerfer) はスチアン族の慣習法に、何れも重要な記録を残している。

此等の調査者の報告を収めて初期には雑誌 *Excursions et Reconnaissances* (1879～1890) が公刊され、更に一八八三年にはインドシナ研究会 (*Société des Etudes Indochinoises*) が発足し、その雑誌は現在まで続いている。しかし最も重要なものは一九〇一年以降最初がサイゴン、後にハノイに移った遠東学院 (*Ecole Française d'Extrême-Orient*)⁽¹⁶⁾ の年報であり、之に發表された考古学・碑銘学・歴史学等の研究は全く画期的なものがあつた。此中に山地民に関する論文も収録されているが、仏国学者の努力が平地文明民族の歴史とは否み得ない。然し本国に於いてリヴェ、モース等の学者が此方面の研究の重要性を力説したので民族學的考察が漸く盛んとなり一九三八年にインドシナ人類研究所 (*Institut Indochinois pour l'Etude de l'Homme*) が設けられ、その雑誌には多くの民族學的調査が収録せられたが、残念ながら戦争によって刊行を停止した。

然し遠東学院の年報はなお刊行をつづけ、研究者の指針となつてゐる。この度の調査が主眼とする地域の民族調査報告にはバラダ (Baradat) のカンボジア西部の原始民サムレ又はバール (*Les Samre ou Pear, population primitive de l'Ouest du Cambodge*) が同誌四一編に發表せられている。その外順化には *Bulletin des Amis du Vieux Huet* が一九一四年以来刊行されている。文化伝統の古い南インドシナは、考古学歴史学等と民族学・民俗学との協力研究の余地が多

(B) カンボジア班調査行動

昭和32年

9月 1日	東京発サイゴン着	遠東学院 ⁽¹⁸⁾ [ママ] 支部訪問・調査準備	
〃月 5日	ブノンベン着	王宮・博物館調査、クメル高度文化および水祭の調査、周辺農村の実態調査	
10月 1日	カンボット着	海岸附近クメル人および他種外来種族の生態調査	南方カンボジア地域 クメル族の稲作および 原住民、原始農業調査
〃月 3日	ボコール着	象山西方に残存するサチオ族調査	
〃月13日	ブノンベン着		
〃月15日	ブルサット着	附近クメル族農村生態の調査、近郊の織物・製鉄村落の調査	
〃月20日	ブノンベアンプルス着	カルダモン山脈東北方居住パール族生態調査	
11月20日	バタンバン着	附近クメル人農村の実態調査および遺跡調査	
12月 5日	シエムレアップ着	北方ブノクレン山附近居住サムレ族の実態調査、アンコール附近調査	北方カンボジア地域 クメル族の稲作および 原住民原始農業調査
昭和33年 1月 6日	コンボトム着		
〃月 7日	プラカン着	サンボルの遺跡およびブノデク鉄山調査、クイ族、パール族の調査	
1月27日	コンボンチュナン着	サムロンセン先史時代遺跡調査、クメル人水上生活調査	
2月 1日	ブノンベン着		
2月 1日	サイゴン着	調査資料整理	安南海岸および中央高地 原住民の村落を調査
〃月 8日	ファンラン着	チャンパ人調査	
〃月15日	ダラット着	ラト族調査	
〃月22日	ジーリン着	マ族調査	
〃月28日	フアンチエット着		
3月 1日	サイゴン着		
3月 2日	ミト着	周辺越南人村落調査	メーコン沖積平野村落、 越南人の農村調査
4月 2日	ヴァンロン着	周辺農村調査	
〃月 3日	サイゴン着		
4月 5日	ルアンプラバン着	ラオス人農村調査	メーコン上流におけるラ オス人農村調査
〃月10日	ウェンチャン着	周辺調査	
〃月25日	サイゴン着	周辺農村調査	メーコン沖積平野村落、 越南人の農村実態調査
6月29日	帰国出発		
6月30日	東京着		

5. 調査行程 (附 要図)

く、□ 行的の調査歴史を持つ此地帯は今後の総合古代文明史的研究の好個の領域であり、東洋学者として実績をもつ本邦学徒の進出が期待せられる。

（A）タイ班調査行動

昭和32年

9月 1日	東京発	サイゴン着	
〃月 2日	バンコック着	諸方面との連絡準備	
〃月15日	チョンブリー着	周辺農村調査 〃 海村 〃	東南タイ地域 主として東南タイ族の居住地域にして国[ママ]有農村形態を所持している。チャンタブリーにおいては海岸村をも調査し、タイ族の漁業文化を研究する。この地域は外国人学者の未調査地域。アランヤプラテートではカンボジア人(クメール族)接触到特に注意する。
〃月25日	ラヨング着	周辺農村調査	
〃月10日	アランヤプラテート着	周辺農村調査	
11月13日	バンコック着	整理連絡	
〃月18日	ナコンラーチャシマー着	周辺農村調査	東北タイ地域 この地域は高原地域でラオスに接し、メーコン川の支流が貫流している。陸稲が栽培され牧畜も行われている。いくつかの種族が居住し、北ラオ族、東ラオ族、プータイ族、クイ族、チャオボン族、カー・プラオ族、ソー族、ティン族等の調査を行い、特に農耕の諸形態を調査する。この地域は従来概括的な調査しか行われていない。
〃月25日	ロイエット着	周辺農村調査	
12月15日	コンケーン着	周辺農村調査	
〃月20日	ウドンターニー着	周辺農村調査	
〃月25日	ナコンパノム着	周辺農村調査	
〃月30日	ウボンラーチャターニー着	周辺農村調査	

昭和33年

1月10日	バンコック着	整理連絡	中部タイ地域 いわゆるシャム族の居住地域でメナム・チャピヤ川流域の米の生産地。タイ国における比較的近代化した農村地帯で近代化の様相の問題に特に注意し、かつ華僑商人・仲介業者・都市化の問題をも調査する。
〃月16日	アユタヤ着	周辺農村調査	
2月15日	チャイナート着	周辺農村調査	
〃月25日	ナコンサワン着	周辺農村調査	
3月 5日	ランバング着	周辺山村調査	北部タイ地域 諸種族の接住・混住する地域、北ラオ族でラフー族、カレン族、カチン族、カムク族、ラウ族、メアウ族、リッスー族、シャン族、リユー族、ヤオ族等につき出来るだけ接触する。諸種族の農耕形態その他文化一般を調査する。
4月 5日	チェンマイ着	周辺山村調査	
5月15日	バンコック着	資料整理 調査遺漏の問題、不明瞭の問題を再調査する	
6月25日	帰国出発		
〃月28日	サイゴン着		
〃月30日	東京着		

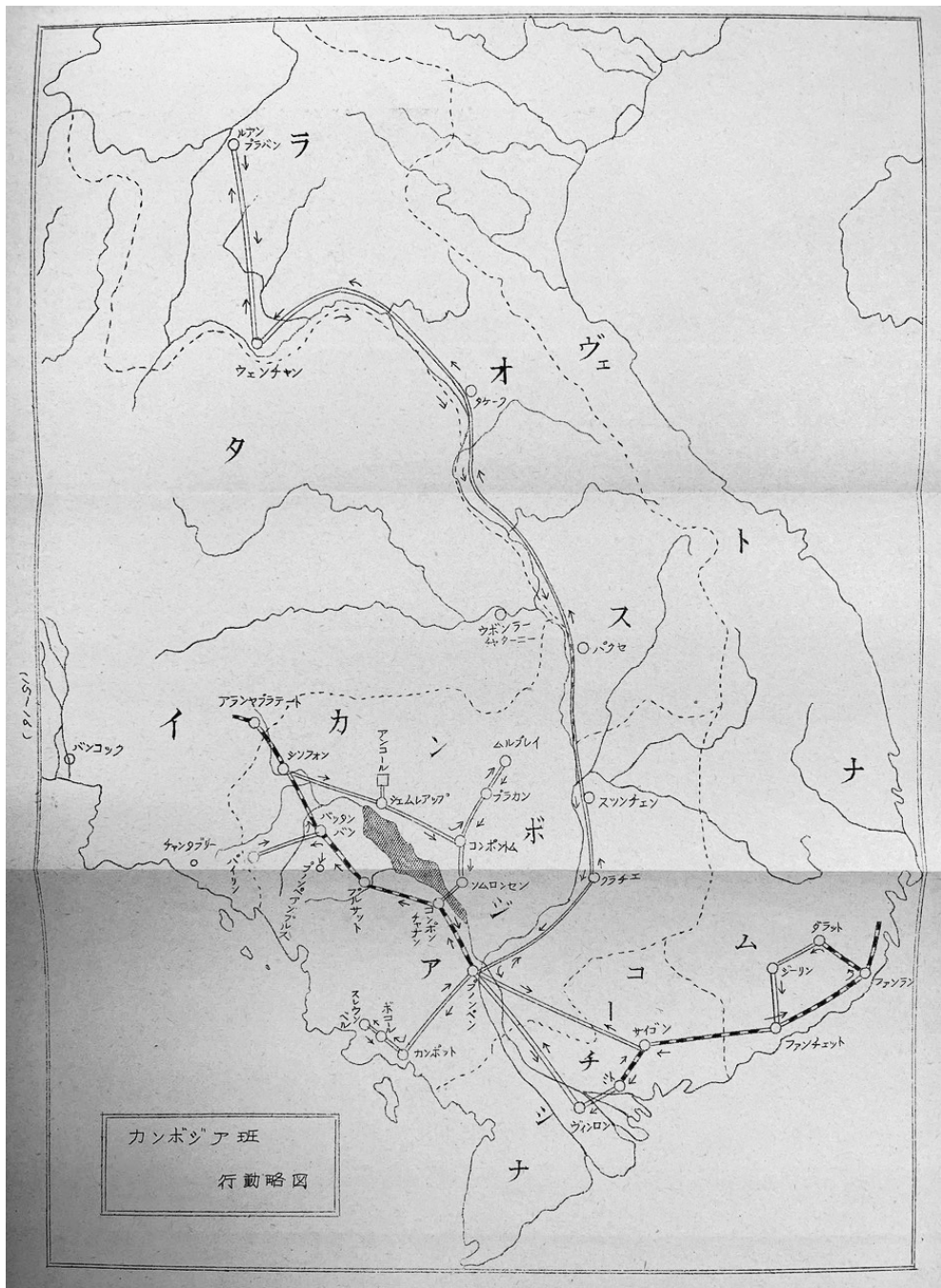


図3 「趣意書」カンボジア班行動略図(計画)(民族学振興会資料65-5)

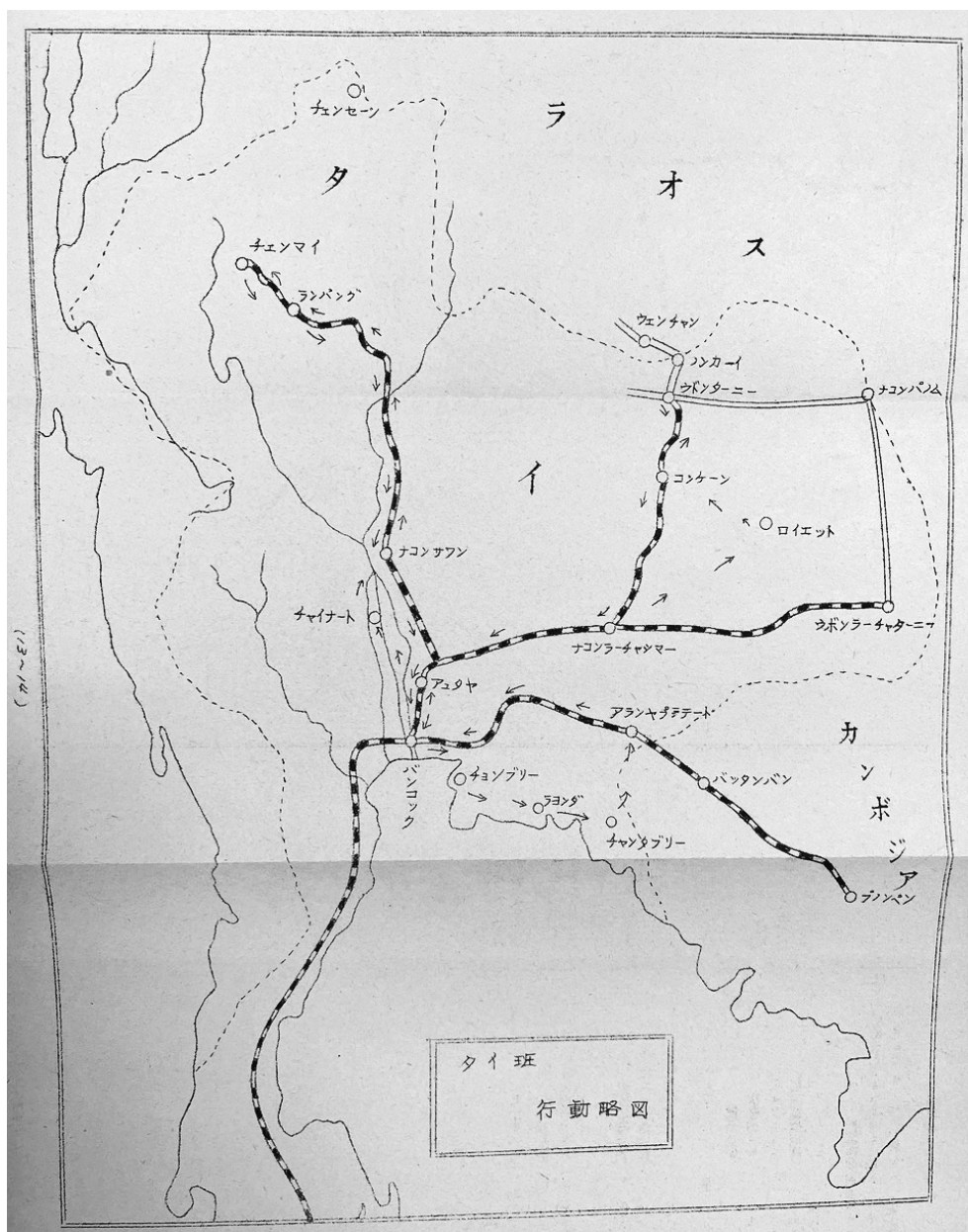


図2 「趣意書」タイ班行動略図（計画）（民族学振興会資料65-5）

6. 所要経費

[総経費] ￥25,229,900

[内訳]

渡航費	1,912,152
滞在費	11,306,400
外地旅費	3,191,748
通訳費	2,880,000
人夫傭上賃	800,000
貨物運賃	1,000,000
支度金	180,000
装備費	2,891,000
保険料	198,600
内地事務費	870,000
計	25,229,900

三 「事業実績報告書」一九五八年四月（民族学振興会資料65-2）

次に紹介する「事業実績報告書」（民族学振興会資料65-2）は、調査本隊が帰国した直後の一九五八（昭和三三）年四月に日本民族学協会理事長の岡正雄から文部大臣あてに提出された一連の報告書である。資料の冒頭に記載があるとおり、文部省の補助金を得ていた関係で作成、提出されたもので、理事長の公印に加えて、表紙の枠外に理事長「岡」、理事「関」、会計「白鳥」、係「松原」の各個人印が押されている。全体としても、「昭和三十二年度補助金寄附金関係書類 東南アジア稲作民族文化総合調査委員会」という標題

の表紙に綴りこまれている資料である。

原本は縦書罫線の用紙を横書として使用し、手書きで記載されている。中には「決算書」「事業実績報告書」「経過報告（松本信廣）」「村落調査」「考古学班調査」「言語学班調査（浅井恵倫）」「農学班調査（1）（浜田秀男）」「タイ班の調査概要」「農学班調査（2）（長重九）」「収集品目録」の各書類が含まれている。一部の書類には個人名が書類名と並んで記されており、それらは筆跡や形式が異なっていることから、それぞれ本人が記載した書類と推測される。

なお、中に含まれる「決算書」と「収集品目録」は、同内容で細部が異なる別書類がそれぞれ存在している。「決算書」については公的な文書として提出された本資料を本稿で書き起こすが、「収集品目録」の紹介については、紙幅の関係もあり今回は見送り別稿を期したい。

昭和三三年四月 日

文部大臣 松永東殿

財団法人日本民族学協会
理事長 岡正雄 〈公印〉

昭和三十二年度東南アジア稲作民族文化総合調査実績報告について、昭和三二年八月二二日文大術第一六号民間学術研究団体補助金交付決定御通知の補助条件第五号による実績報告書（収支決算書、事業実績報告書）を別紙のとおり提出いたしますからよろしくお願いいたします。

第一次東南アジア稲作民族文化総合調査（一九五七～五八年）

に関連する民族学振興会資料について（高城）

昭和 32 年度東南アジア稲作民族文化総合調査事業収支決算書

1 収入の部

項目\区分	予算額	予算増減額	決算額	備考
政府補助金	4,000,000	0	4,000,000	
寄附金注入	13,668,240	△4,034,802	9,633,438	
雑収入		29,963	29,863	預金利息
収入合計	17,668,240	△4,004,939	13,663,301	

2 支出の部

項目\区分	予算額	決算額	補助金 使用予算額	補助金 使用額	備考
人件費	650,000	334,800	-	-	
職員俸給	450,000	330,000	-	-	2名 (月額)20000 (月額)10000
手当謝金	200,000	4,800	-	-	
事務所費	600,000	914,568	-	-	
図書購入費	30,000	26,330	-	-	図鑑、地図、旅行案内
消耗品費	36,000	50,564	-	-	
旅費交通費	240,000	582,575	-	-	都内募金交通費、地方在住団員上京旅費、都内一般事務交通費
通信費	95,000	68,089	-	-	電信電話郵便料、募金依頼状並礼状発送
印刷製本費	35,000	19,100	-	-	趣意書、報告書、礼状募金関係印刷物
水道光熱費	30,000	0	-	-	
会議費	48,000	116,102	-	-	
交際接待費	50,000	0	-	-	
雑費	36,000	51,808	-	-	
事業費	15,418,240	11,791,044	4,000,000	4,000,000	
調査旅費	10,442,640	7,164,295	3,000,000	3,000,000	
渡航費	1,887,600	1,134,810	847,000	847,000	航空旅費 船舶旅費
滞在費	8,555,040	6,029,485	2,153,000	2,153,000	
通訳費	600,000	1,295,614	601,642	601,642	
人夫傭上賃	200,000	198,358	198,358	198,358	
諸謝金	300,000	187,687	0	0	
交通費	540,000	628,831	0	0	
船便輸送費	300,000	757,014	200,000	200,000	
標本類購入費	500,000	194,567	0	0	
装備費	1,290,000	438,087	-	-	
服装費	650,000	189,657	-	-	
器具費	640,000	248,430	-	-	テープレコーダー1台
消耗品	738,400	419,476	-	-	
通信費	70,400	79,270	0	0	
保険料	436,800	427,845	-	-	
予備費	1,000,000	0	-	-	
支出合計	17,668,240	13,040,412	4,000,000	4,000,000	

収支差額 ￥622,889

事業実績報告書

1. 現地調査については予定のとおり調査団を組織して計画的に調査を遂行し各方面の御協力御後援によりお蔭をもって、大体において予期の成果をあげることができました。詳細別紙松本団長の調査報告書により御了承願います。

尚、ヴェトナム調査班は、日本ヴェトナム間の政治的事情により遺憾ながら出発延期するのやむなきにいたしましたのもあわせて御承認願います。

2. 調査団員は全員頗る健康に恵まれ、予定の日数(当初より一七日間延期)にて調査を完了いたしました。岩田、綾部両団員は調査用務の都合により、三二年度の調査は三月末をもって一応打ち切り、引続いて現地に滞在し調査を続行しておりますが、五月中旬帰国の予定であります。⁽¹⁹⁾

東南アジア稲作民族文化総合調査団経過報告

松本信廣

此度の調査団はその調査をエクステンシブなメーコン河流域の概観的調査とインテンシブなタイ、ラオス、カンボジア各地域の調査との二期に分けて実施した。前者は昭和三二年八月二八日より二月中旬に亘り全員之に當り、後者は大体分散して村落に入り、昭和三二年一〇月下旬より昭和三三年三月末に至るまで調査を実施した。

1. メーコン河流域の概観的調査⁽²⁰⁾

最初メーコン河の下流ヴェトナムより調査する手筈であったが、ヴェトナム政府の入国査証が手間だったので、全員バンコックに集合し同地より調査を開始した。所がタイ国も未曾有の政治上の変革が勃發⁽²¹⁾内地調査の許可が得られず、止むなく好意的であったカンボジア、ラオス両国より調査を実施することにした。加ふるに此年は雨期あけが一月遅れた為車輛部隊の行動は著しく阻害され、全員がカンボジア、ブノンペンに集合したのは九月一三日であった。かくて九月一八日先發隊は南路からコンボンチャムに至り本隊は遅れて北路より二一日之に合し、それよりクラチエ、スワンクレンとメーコン河に沿ふて北上し、二五日国境を越えてラオス国に入り、南方平野の中心なるバクセに至り、此処を中心として付近を調査した。即ち本隊はボロバン高原を視察し、その中岩田、綾部二名は後に残って中心地バクソン村の聚落構造及び附近カー族の生態を調査し、また言語学班なる浅井も残留してインドネシア語族なるアラック、ラヴェの二族の言語を調べた。一方考古学班なる松本、江坂は分れてチャム、バサックに至り、真臘發祥の地と云はれるワット・プーを踏査し、山と水との原始信仰が王権と関係あることを調査した。更に調査団はバクセよりサバナケックを経てタケックにと北上したが、ラオスの北部は雨期の為道路は破損し、タケック、ヴェンチャ間は道路通ぜず、此為調査団はトラックをタケックに置き、ジープ隊と船舶隊との二隊に分れ、前者(河部、八幡、濱田、長)はタケックよりメーコンを渡ってタイ領に入り、東北タイを横切つてヴィ

エンチャ「ママ」⁽²²⁾に至り、後者（松本、江坂、石井）はメーコン河を遡航し、両隊共一月五日に首都に到着し、折柄行はれた佛誕二千五百年祭の盛観に接するを得た。調査隊は此地を基点として分散し、ジープ隊はク・ブーン峠の難路を越えてルアンプラバンに入り、同地より輕舟に乗じてメーコン河を遡航し、タイ・ビルマ国境なるチェンセンに至り、メーコン河踏査の目的を達成した。またその他の隊員は空路ルアンプラバンに至り、付近を調査したが、岩田、綾部は更にシナ国境に近きナムタに飛び、民族学的調査をなし、松本、濱田、江坂は一旦ヴィエンチャンに引返し、空路シェンカン高原に飛び同地帯の考古学的農学的調査を試みた。

また調査団に随伴した読賣報道班はルアンプラバンまで、同映画班はク・ブーン峠まで行を共にし、それぞれ成果を挙げた。

カンボジア班は一月二八日ヴィエンチャンを發し、元の道を下り、カンボジアに帰り、連絡の爲一旦バンコクに集合し、此処で江坂は清水と交代し、一月二三日空路帰国した。タイ班はバン・フウ・サイより空路一月二八日ヴィエンチャンに帰り、一月一日より八日まで付近のバン、ノン、ヘオ「ママ」の村落を調査し、九日より河部、八幡、長、石井はジープにより、東北タイに入り、ラオ族農村、プテン族等を調べつつ一七日バンコクに帰着した。

村落調査

調査項目	日時
カンボジア班松本は江坂と代わった清水と共に下の調査を実施した	
1) バッタンバン省ブノム・トム及び附近調査。 カンボジアの穀倉と云はれる地方の典型の一聚落をえらび、各戸別に訪問して人口を調べ、その六割が土地を有せざること、他地方よりの移住者であること、比較的シナ人の移住者多きこと、治水及び村落行政に改善の余地あることなどを調査した。	昭和33年 2月 2日 （ 2月13日
2) カンダル省ビニヤ村調査 トンレサップ河々岸上の村落で洪水後の土地を利用して耕作する村の実態をしらべ、住民が古来より永住せるも各戸の土地所有が零細であり無産者多く、また、三百年前此處に日本人が居住せるもその痕跡消滅せることを確かめ得た。	⁽²³⁾ 2月23日「ママ」 2月16日 2月24日 2月25日 2月26日 2月28日 3月 1日 3月 5日 3月11日 3月14日 3月15日 3月16日

ロヴェック王城遺蹟の調査	2. 23
ブノンハセ(クメール遺址)の調査	2. 23
プリック、チトロップにおける土器製作の調査	2. 16 24 28
ウドンにおける真鍮鍋作りの調査	2. 28
ウドン王都址の調査	2. 28 3. 1 3. 5
バーブノム(クメール遺址)の調査	3. 4
ブノムダー遺址の調査(クメール遺址)	3. 6
ピニアルーにおける独木舟の調査	3. 11
ウドン東南における独木舟の調査	3. 14
サイゴン博物館蔵品の調査	3. 23
以上	

言語学班調査 浅井恵倫

調査項目	日時
1. タイ バンコック南方 Paklat、北方 Pakret 居住モン族言語の調査	昭 32. 9. 12～22
2. カンボジア、プノンペン a) クメル語音韻及方言の調査 b) Chruai-changwar, PrekPra, Udong, SveyMie 等居住チャム族部落の言語調査	9. 25～10. 10
3. ラオス ボロバン高原居住 Kha Lawen, Kha Alak 両族言語の調査	10. 26～11. 3
4. カンボジア Chruai-Changwar 部落チャム語調査続行	10. 26 11. 4～11. 14
5. タイ バンコック a) Paklat, Pakret モン族言語調査続行 b) バンコック国立図書館所収モン古文書調査 c) 太平洋学会会議日本代表として出席	11. 14～12. 19
6. ラオス ウェンチャン[ママ] a) ラオス語方言調査 b) タイ ノアル Thai Noir 語調査	12. 20 昭 33. 1. 3
7. バクセ Kha N̄ahum, Kha Tawi 族言語調査	1. 4～1. 6
8. カンボジア、プノンペン チャム、クメル語研究続行	1. 7～28
9. ヴェトナム フアンラン地方居住チャム人言語調査	1. 31～ 2. 3
10. グラット ジャライ語調査	2. 3～ 2. 4

考古学班調査

松本、江坂(後に清水に代る)は下の個所の考古学的調査を実行した

調査項目	日時
タイ国立博物館、土器、石器、銅器の調査	昭 32. 9.10～23
プノンペン博物館、土器、石器、銅器の調査(特にサムロンセン貝塚出土品)	9.25～28. 30
バサックにおける真臘故都の調査	10.27
タケックにおける寺院並に石灰洞調査	10.31
ヴィエンチャンにおける寺院の調査	11.8～14
ルアンプラバン上流タム□□石灰洞調査(撚乗文土器発見)	11.18
ルアンプラバン東方において石器時代遺跡を発見、調査	11.20
シェンカン周辺巨石遺蹟の調査	11.22, 23
ルアンプラバン□□において銅鼓の調査	11.26
タケック東方石灰岩洞窟の調査	11.30
ストウトレン対岸にある寺院址の調査	(24) 12.9 5
ワットノコール(コンボンチャム)の調査	昭 32.12.26 9
プノンペン市中の寺院調査(ワットブラケオ、ワットボトゥムヴォディ etc.)	12.29 26
ウドン王陵の調査	昭 33. 1. 3 32.12.29
アンコールワットの調査	昭 33. 1. 3
アンコールトム、ブラカーン、ネアクピアン ^の 調査	1. 4
プラサットクラバンブンラップ、メボンオリエンタル、バンティグヂイ、バンティスレイの調査(アンコール)	1. 5
アンコールワット 特に石□にある日本人落書の調査	1. 6～ 9
パイヨンの調査(アンコール)	1.10～11
バクセイチュムコロム、バプオン、ブラビッ、ピミアネカ、プノムクロムの調査(アンコール)	1.12
プノンペン博物館蔵品調査	1.15
デノムトム石灰洞窟の調査 アンコールトムの調査	1.20
デノムプラサット(クメール遺蹟)の調査 バンティスレイ、バンティサムレの調査(アンコール)	1.21
タープロムケル、トマノン、チョーセイテボダ、タープロム、タケオの調査(アンコール)	1.22
プラコー、パコン、ロレイの調査(アンコール東方)	1.23
プノンペン博物館蔵品調査	1.28
プノムトム石灰洞窟の調査	2. 2
プノムプラサット(クメール遺蹟)の調査	2. 3
プノンペン博物館における蔵品の調査	2.17 20

14日	Vientiane-USIS (米国情報部) Dolf Droce氏及びLaos農務局長Phanh面会 Laos稲作につき資料をうく。
16日	B Nong Heo再訪。栽培稲7品種採集。
19日	Corrigan氏案内Kha-Mon及びMeoの部落視察。B. HonHiKingのKha-Monより数点の陸稲をうく Stick Lackの枝を採る。 B. Khingangの苗族はKhaoNaとKhoHai両種の稲を作る。 Kha-Mon部落の焼畑では素手で稲をしごいて収穫したあとを見る。
21日	Vientiane朝市見学
24日	B. NasaiにてPho-Deng (Laos人)の農業経営調査
25日	Xieng-Khouang郊外Chia-Xong (Meo人)農家調査 Chong Neng (Meo人)農家調査
26日	B. NiewのLao人Naido氏の農業経営調査
27日	Mr. Xieng Khamdy (Lao人)及びMr. Vang Cheu (Meo人)の農業経営をきく
28日	B. Bouam-NatのMr. Ba Pao (Meo Khao白苗)を訪ね、農業経営をきく
12月 5日	Paksé朝市にて60余種の品物を見る。
6日	Stung Treng朝市40数種の品を見る。対岸のThalabarvat訪問、Kao San品種をうく
7日	Samborの古跡訪問、途上稲品種SrauTanau, SrauKsai等数点を得。
17日	Saigon、植物園及びCholn穀船、精米所見学
12月24日	Batthambang稲育種場視察
1月 2日	Bangkok港発
1月17日	神戸帰国

タイ班の調査概要

タイ班の調査の目標は、主として農村を中心とした稲作民族文化のそれである。調査は前後二期にわかれ、第一期はメコン河を遡航しつつ、概況調査を協力的に行い第二期は各専門分野及び分担に従って、独自の行程をたてて調査を行った。概ね下記のとおりである。

第一期(昭和三年九月～二月)

調査団は九月に、タイ国の首都バンコックに集結したが、タイ班は空路、列車にて先発したカンボジア調査班の後を、自動車五台に分乗沿道農村の概況調査を行いカンボジアの首都プノンペンにおもむき、先発隊に合流した。それよりラオスの主都ウエンチャン、王都ルアン普拉バンを経て、メコン流域の農村調査の最終点である北タイの古都チェンセーンに到達した。此の間八幡隊員は農村技術文化の調査及び資料を蒐集し、長隊員は各種の標本採集及び栽培方法等を調査し、河部隊員は農村経済の概況及び農村用語の採集を行い、岩田、綾部隊員は農村社会構造の概況調査を行った。

第一期調査の末期(二二月初旬)、タイ班はそれまでの概況調査にもとづく知識を整理し、また今後の各個調査における項目の連絡を目的として、ウエンチャン附近のラオ族の農村バン・ノン・ヘオを選定し、集約的総合調査の予備調査を一週間行ったのである。

第二期(二月～昭和三年三月)

八幡、長、河部隊員はタイ国地域調査を行うべく、ジープにて東北部タイを調査しつつバンコックに帰着した。岩田、綾部隊員はラ

農学班調査 (1) 浜田秀男

9月13日	タイ国立農科大学 Kaset-Sart University 訪問
14日	農務省訪問 米穀局長 Sala Dasananda 博士に会見 稲作その他につき懇談
17日	バンコック近郊 Bang Bang 及び Nam Pho 居住の Mon 族を訪ね、糯 (Khao Nieu) と粳 (Kho Chao) につき聴く。夕刻大使の招待をうく。
21日	Churalongkern [ママ] 大学理学部訪問
27日	Phnom Penh 対岸 Preak-Leap 農学校長 Lon chun 氏及び農林畜産学校 Ho-Ton-Lip 教授面会
28日	Saigon 街道 Banteai Dek に到り浮稲調査
29日	San Oudong に到り稲の植付を見学、撮影
30日	Battam bang 稲育種場訪問移植中及び出穂期の稲田あり、場長 Meas Chuth、省長 Gran Kimy 及びコロポプランによる育種事業指導者佐藤幸平の諸氏に面会。
10月 1日	Dom Bleang に於ける□糯 Nar Nhik に於ける浮稲野生稲調査
2日	Ho Ton Lip 氏を訪問
5日	農林畜産学校にてラック原料 Malanorrhoea 及び Combretum の腊葉、種実を見る。炭化米粒 (Pursat 省 Phsarkror にて1953年採集) 少量入手
6日	Thak Thela (P. Penh より5 km) 及び Kompong Kathuth (P. Penh より29 km) にて野生稲採集
7日	P. Penh 中央市場にて粳の黒色米と白色米を購入
14日	Sanbour 及び Bak-Chan 附近にて湿地に叢生する野生稲を採取す
15日	Sambour 再訪、野生稲調査撮影
16日	Ph-Sar Oudong にて稲穂を採取
18日	Banteaé Dék 訪問浮稲3 m に伸張
20日	Chub の Hevea Plantation を Mr. Doussonx の案内で見学
21日	Vat-Nakor (Kompong-cham 近郊 Sabou Meas 村在) 訪問、次々にボートにて対岸 Chihe 部落に行き農耕状態をきく。全耕地約27.935ha、玉蜀黍1000Ton、稲(粳)500Ton、Kapk170Ton、胡麻100Tonの年産額あり
22日	Kompong-cham より Kratie へ Chup の Hevea Plantation を副支配人の案内にて詳細に説明をうく
24日	Stung-Treng 滞在。郊外にある種苗農場 (Pépneire Agricola) にて Koent Len 氏説明
25日	Paksé に近づき、白又は赤の芒のある野生稲多く見ゆ。水稻は印度型らしく熟期にあり、種穂刈又は茎の中途にて刈る、陸稲は成熟す。栽培水稻と野稲と混生す。
26日	Paksé より Paksong へ、Paksong 農事試験場見学
27日	Bolovene 高原の農耕開発を調査
29日	Paksé より Savannakhet、沿道野生稲多し、栽培稲は生育不良
31日	Thakkek 泊り、Wat Khen Muang (寺) 訪問。寺の附近にて水稻収穫、茎中央又は穂首刈取、Ban □ong-Khaniu にて稲採取
11月 1日	Thakkek より Nakorn-Phanom へ 収穫中の稲を採取、生育よろし
2日	Nakhorn Phanom より Sakol-Nakhom へ 野生稲二種採取、Khao Nok 即ち鳥稻と称す。他に栽培稻(水稻)10数品種採取
6日	Vientiane 滞在、国立農事試験場を訪ね場長 Meksyornh Kesptra Seuth 氏に糯稻の系統分離の仕事をきく。
8日	That Luong 再訪。Laos 奨励稲品種20点を受く。

12月13日	Maharakam 発 Roietを経てUbon 泊 附近農村を調査す Ubon 市に蔬菜を供給する安南人部落を調査す。
12月15日	Ubon 発 Maharakam 泊 沿道降水量不足のため作付不能田多し
12月16日	Maharakam 発 Korat 泊 沿道水不足のため作付不能田多し
12月17日	Korat 発 Bangkok 着
12月27日	Bangkok 発 Chiangmai 泊 Maejo 農事試験場、SanPatong 稲作試験場を見学 附近農村 を調査し、種子を集める。
12月30日	Chiangmai 発 Bangkok 着

オ族農村の集約的調査を目的として、ウェンチャンに留り、それぞ
れ農村を選定し定着した。

八幡隊員はバンコック帰着したのち、中部タイ、東南タイ、南タ
イ半島部に赴き、農村技術文化の比較調査を行い、一月中旬帰国し
た。

長隊員はバンコック帰着の後、市内の農事試験場及び北タイ、チ
ェンマイの試験場等を訪ね、タイに於ける稲に関する資料、標本の
蒐集を行い、一月初旬帰国した。

河部隊員はバンコック帰着後、調査事務の整理を行いつつ、市内
の文献、資料の蒐集及び調査を行い、実地調査の文献的裏づけにつ
とめた。二月再びカンボジアに赴き農村調査を行い、同下旬より三
月初旬にかけて北部タイの調査旅行に赴き、ビルマ領ケントン州に
入り、主としてタイ諸族の農村調査を行った。北タイと中部タイの
境界にあるスコータイ附近のバン・カウに於ては、数日間定着し、
農村経済の集約的調査を行っている。三月下旬帰国す。

岩田隊員は昭和三三年一月以降ラオスのウェンチャン北方五〇軒
のバン・ヴィエンを中心にラオ族農村の集約的調査を約二ヶ月行い、
更に三月に入り、ヤオ族の村落に定着して社会調査を行っている。

綾部隊員 昭和三三年一月以後 ウェンチャンの附近のラオ族農
村の社会調査を二ヶ月続行し、それと比較研究を目的として、三月
以降は北タイのチェンマイ南方五〇軒のラオ族農村の調査を続行し
ている。

農学班調査（2） 長重九

昭和32年 9月13日	Bangkok 着 Bangkok 周辺の農業試験研究機関を訪問しタイ国に於ける稲の育種研究並に品種改良事業及び農業技術の改善に関する組織施設を調査す。 Kasertrart[ママ]農科大学、Rangsit 農事試験場を見学、Ayuthaya 及び NakhonPathom を中心とする Bangkok 平野の稲作状態を調査す。
10月 6日	Bangkok 発 Aranya 泊 タイ国境附近の水稻品種を集める。
10月 9日	Aranya 発 Siem Reap 泊 Ankorwat 周辺の稲作を調査す。Siem Reap 近郊で初めて野生稲を観察、其出穂状態を撮影し株を採集す
10月14日	Siem Reap 発 Phnompenh 泊 Phnompenh 南郊30k に於て、浮稲の栽培状況を調査し、野生稲の分布等を調査す。
10月20日	Phnompenh 発 Kompongcham 泊 沿道の水稲の移植作業を見学す
10月22日	Kompongcham 発 Krachie 泊 水稻の刈取作業を見る。カンボジア特有S字形鎌による稲刈を撮影す
10月23日	Krachie 発 Stungtreng 泊 Pipiniché Agricol を訪ね、各種果樹蔬菜の育苗事業を見学す
10月25日	Stungtreng 発 Pakse 泊 Boloven 高原視察のため高原を横断し Salavane に至る、途中 Paksong の農事試験場を見学し、高原の陸稲栽培状況、林相、地勢等を調査
10月30日	Savannakhet 発 Thakhek 泊 Thakhek 周辺の稲作を調査、稲刈、脱穀、つめ鎌の使用法などの作業状況を撮影す。附近に栽培されている水陸稲の種子を集める。Thakhek より東方50k の Mahaxay 村を訪ね附近の水陸稲種子を集める。
11月 1日	Thakhek 発 Mekong を渡り、Nakon Phnom 泊 近郊の農村を視察 Laos との稲作の比較調査をする。附近農村にて水稻種子を集める。
11月 2日	Nakhon Phnom 発 Sakhon Nakon 泊 この沿道は東北タイ Korat 高原の重要な稲作地帯であるので途中出来るだけ多くの水稻種子を集める。大型の野生稲を採取する。
11月 3日	Sakhon Nakon 発 Udon 泊 Udon 附近農村を調査し、Udon 西方50k Mak Luaw 村付近迄調査 水、陸稲の種子を集め、野生稲の分布を調査す。
11月 5日	Udon 発 Nongkai を経て Vientiane 泊 Vientiane 滞在中、農務局、USIS、USOM の農業課を訪問 資料を見る。農事試験場を見学し、水陸稲の種子を入手す。Vientiane 近郊の Lao、Thai Dam の部落を調査しつつ、水陸稲の種子を集める。
11月15日	Vientiane 発 Phatang 泊 山岳地帯の稲作を調査しつつ、陸稲の種子を集める。
11月16日	Phatang 発 Phukhoun 泊 途中 Yao 族の焼畑を視察、種子を集める。Phukhoun の苗族の部落を訪ね、焼畑の陸稲栽培状況、稲刈、脱穀等の諸作業を撮影す。
11月18日	Phukhoun 発 Luang Prabang 泊 附近農村を視察す。
11月20日	Luang Prabang 発 船で Mekong を遡航す 途中両岸の農村を調査しつつ、陸稲の種子を集める。
11月27日	Chiengsen 泊 Chiengsen 及 ChiengRai 附近の水陸稲の種子を集める。
11月28日	Chiengsen 発 Vientiane 泊 Vientiane 周辺の農村を調査す。 Ban Non Haeo 村では約一週間 Thai 班全体として協同調査をする
12月 9日	Vientiane 発 Nong Kai を経て Udon 泊 これより東北タイの Krat 高原の各地を調査しつつ、Bangkok へ至る。
12月10日	Udon 発 Dong Muang 村泊 稲作並に甘蔗栽培状態を視察す。 Phu Thai 族の Ban Na Hi 部落を調査し、水陸種子を採集す。
12月12日	Dong Muang 発 Mahasarakam 泊 途中浮稲栽培を見学、この辺一帯雨期の降水量が少なかつたため植付不能水田を多く見る。

採集した種子目録は目下整理作製中

本人持帰った分

タイに於ける採集種子

68品種

ラオス

95 "

合計

163 "

4月7日神戸着の分は、カンボジア国 バッタンバン 農事試験場保存全品種で約200品種と思われる。

四 「趣意書」と「実績報告書」の注目点

最後に、本稿で紹介した「趣意書」と「実績報告書」の二つの資料について、順を追って注目点をいくつか列挙して整理しておきたい。

「趣意書」の注目点

(1) 「趣意書」は国内の行政機関や各種組織に対してその計画概要をまとめたもので、同時に抄訳ながら英語版と仏語版も存在しており、調査対象国などの国外の関係機関にも向けた国際的な対外向け文書となっている。

(2) 「趣意書」は同時に「後援会趣意書」の原本として、国内の企業や個人から寄附を募るための文書にも転用されている。後援会

には渋沢敬三を会長として、石黒忠篤などの国会議員や経済団体関係者、生命保険協会会長などが名を連ねている。

(3) 「趣意書」における財団法人民族学協会の紹介には、「純粋民族学者のみならず、言語学者・歴史学者・先史学者・地理学者・農学者で民族学に関心を有し、この学問の重要性を認識する学者は殆んどすべて協会に所属」しており、「全国の専門家を網羅する全国単一学会」であるとしている。

(4) 「趣意書」にある東南アジア稲作民族文化総合調査委員会は、岡正雄を委員長として、幹事一名、委員一三名から組織され、幹事は第二次調査、第三次調査も含めた調査計画の中心となっている。

(5) 「趣意書」作成時点における調査隊員候補者は、タイ班一〇名、カンボジア班一三名の名前が挙げられているが、資料内注記にもあるようにあくまで候補者で、この中で実際に調査に赴いたのはタイ班で五名、カンボジア班で四名であった。

(6) 「趣意書」の趣旨では、当時の東南アジアが「政治的、経済的に益々重要性」を増している一方で、「従来殆ど基本調査が行われていなかった」ことや、欧米の研究も「植民地の個別研究」に止まり、「特殊的興味に偏向」していると指摘している。従って、「日本民族学界の緊急かつ重要な課題として自然科学・文化(社会)科学両面に亘る専門学者の協同によって、……東南アジア諸民族……の基本的文化構造・歴史的系統的関係を究明し、併せて近代化諸問題をも研究の対象とする」ことが述べられている。

(7) 「趣意書」の趣旨において、「日本民族文化の源流並に性格

は正に東南アジア研究の成果と照し合わせて始めてこれを解明し得ると共に、日本民族との関連に於いて広く東南アジア稲作諸民族の間に見られる親近性・共通性および特殊性もこの種の綜合的研究を通じてのみこれを充分に理解し得る」と指摘されている。

(8)「趣意書」の趣旨において、戦後は特にアメリカが東南アジア各地での実態調査を進めており、日本は戦中までの東南アジア研究の諸機関が終戦と共に解体消滅したことから、「日本学界の最も重要かつ有望な研究地域として確保し」、「広く我国の東南アジア理解と學術的提携に役立てる必要」があると指摘されている。

(9)「趣意書」の趣旨において、「欧米語または欧米語文献のみを媒介とする東南アジア研究には限界があり、徹底を期し得ない。民族學の実態把握と民族語の修得によって初めて充分の効果を期待し得る」ことが指摘されている。

(10)「趣意書」の計画概要において、班編成は、カンボジア班とタイ班に分かれ、カンボジア班では、ベトナムの調査も予定していた。各班は、「民族學者二名、言語學者一名、歴史考古學者一名、農學者一名、および助手二名」という分野ごとのバランスが考慮されていた。

(11)「趣意書」の計画概要（この地域の意義）において、東南アジアが「日本民族或は日本稲作文化の系統・源流の究明にとり極めて重要な意義」をもち「太平洋諸地域（日本を含む）へ拡大分散した諸民族並に諸文化潮流の揺籃の地であり、また出発点であったと推定」されることが指摘されている。

(12)「趣意書」の計画概要（研究事項）において、「生活実態をインテンシブに綜合的に調査」し、「成果を夫々モノグラフとしてまとめる」ことが計画されている。稲の農學的系統、農耕技術、神話・宗教儀礼、社会・經濟構造、考古學、言語學、日本民族との關係、近代化、日本人移民の適応、映画・写真・録音による記録など、網羅的な項目が挙げられている。

(13)「趣意書」の諸外国の調査研究活動の概況において、タイ地域とカンボジア地域とに分けて先行研究がまとめられている。タイ地域については、欧米の研究者のみならず、民俗、歴史、言語の分野におけるタイ人研究者の研究もとりあげ、アメリカのコーネル大學による当時の調査が注目されることが指摘されている。カンボジア地域においては、一九世紀末からのフランス人による探検や遠征、宣教の報告書から、一九〇一年以降の極東學院による報告まで広く重視し紹介している。そこでは、「考古學歴史學等と民族學・民俗學との協力研究の余地が多く」、「今後の綜合古代文明史的研究の好個の領域であり、東洋學者として実績をもつ本邦學徒の進出が期待」されることが指摘されている。

(14)「趣意書」の調査行程は、出発前の調査計画を記している。タイ班調査行動においては、東南タイ地域の項目をたて、「この地域は外国人學者の未調査地域」とし、「カンボジア人（クメール族）接觸に特に注意する」ことが記されている。その他、東北タイ地域については、「この地域は従来概括的な調査しか行われていない」こと、中部タイ地域については「タイ国における比較的近代化した

農村地帯で近代化の様相の問題に特に注意し、かつ華僑商人・仲介業者・都市化の問題をも調査すること、北部タイ地域については、「諸種族の接住・混住する地域」として山地少数民族に出来るだけ接触することが記されている。

(15)「趣意書」の調査行程のカンボジア班調査行動においては、王宮・博物館などでの「クメル高度文化」の調査と、アンコール附近などの遺跡調査のほか、南方・北方カンボジア地域におけるクメル族の「原住民、原始農業調査」が項目に挙げられている。さらに当初の計画としてベトナム南部を中心とする「安南海岸および中央高地原住民の村落」と「メーコン沖積平野村落、越南人の農村」の調査が掲げられていた。一方で、ラオスに関しては、「ルアン普拉バン」と「ウェンチャン」での「メーコン上流におけるラオス人農村調査」に限られ、当初の計画では限定的であった。

(16)「趣意書」の所要経費において、当初は二五〇〇万円を超える経費を想定していた。

「実績報告書」の注目点

(17)「実績報告書」は、文部省から学術団体補助金の交付を受けていたことから、文部大臣宛に提出されたものである。そこでは会計年度が三月末までで切り替わることから、「趣意書」で一九五八(昭和三十三年)六月までとしていた調査計画時期を、調査本隊が帰国した三月末までで区切りを付け、報告書と決算書を提出している。

(18)「実績報告書」の収支決算書において、収入として政府補助

金四〇〇万円に加えて寄附金が約一三六七万円集まり、収入合計が一七六七万円程となっている。支出においては、調査旅費が約七一六万円(渡航費約一三万円、滞在費約六〇三万円)で最多を占め、次に通訳費約一三〇万円が多くなっている。

(19)「実績報告書」において、「大体において予期の成果をあげることができ」た一方で、「ヴェトナム調査班は、日本ヴェトナム間の政治的事情により遺憾ながら出発延期するのやむなき」にいたったことが記されている。

(20)「実績報告書」の経過報告において団長の松本は、「エクステンシブなメーコン河流域の概観的調査とインテンシブなタイ、ラオス、カンボジア各地域の調査との二期に分って実施」したと総括している。前者の「メーコン河流域の概観的調査」においては、「ヴェトナム政府の入国査証」に手間取り、またタイの「未曾有の政治上の変革が勃發」したことで、やむなく計画を変更して「好意的であったカンボジア、ラオス両国より調査を実施」したことが記されている。

(21)「実績報告書」の松本による経過報告において、カンボジアのプノンペン、コンボンチャムから「クラチエ、スワンクレンとメーコン河に沿って北上」してラオスに入り、パクセ附近を調査、ポロバン高原から村落調査と言語調査に分かれたこと、考古学班は「真臘發祥の地と云はれるワット・プーを踏査し、山と水との原始信仰が王権と関係あることを調査」したことが記されている。さらに調査団は「パクセよりサバナケックを経てタケックにと北上」し、

タケツクで「ジープ隊と船舶隊との二隊に分れ」、首都のヴィエンチャンに至って、そこで折よく「佛誕二千五百年祭の盛観」に接したことが記されている。その後ジープ隊はヴィエンチャンから「ク・ブーン峠の難路を越えてルアンプラバンに入り、同地より輕舟に乗じてメーコン河を遡航し、タイ・ビルマ国境なるチェンセンに至り、メーコン河踏査の目的を達成」したことが記されている。特に「岩田、綾部は更にシナ国境に近きナムタに飛び、民族學的調査」も行っている。

(22)「実績報告書」の経過報告と村落調査において、カンボジア班の江坂は後半から清水に交代したことが記されている。カンボジア班の村落調査においては、「典型的「聚落」と「洪水後の土地を利用して耕作する村」を選択して調査し、戸別訪問の人口調査などによって、特に前者が「土地を有せざることを、他地方よりの移住者であること、比較的シナ人の移住者多きこと、治水及び村落行政に改善の余地あること」を調査したことが記されている。

(23)「実績報告書」の考古学班調査（松本、江坂、後に清水）において、各地で真臘故都、石灰洞、石器時代遺跡、巨石遺蹟、銅鼓、王陵、アンコール遺跡、博物館藏品などの調査を行ったこと、特にアンコールワットの「日本人落書の調査」も行ったことが記されている。

(24)「実績報告書」の言語学班調査（浅井）において、タイの「モン族言語」「モン古文書」、カンボジアの「クメル語音韻及方言」「チャム族部落の言語」、ラオスの「ラオス語方言」「タイノアル

Thai Noir 語」「Kha Nahum, Kha Tawi 族言語」、ヴェトナムの「チャム人言語」「ジャライ語」の調査をそれぞれ行ったことが記されている。

(25)「実績報告書」の農学班調査（1）（浜田）において、タイとカンボジア、ラオスの農科大学、農務省、稲育種場、農事試験場などを訪問し、植付、野生稲、浮稲を調査し、各所で稲穀や野生種を採集・採取したことが記されている。特にラオスでは、「Vientiane-USIS（米国情報部）」を訪問し稲作の資料を得、農業経営や山地少数民族の陸稲の調査も行っている。

(26)「実績報告書」のタイ班の調査概要においては、特に記載者名は記されておらず、班全体の調査概要が記されている。タイ班の調査は「前後二期にわかれ、第一期はメコン河を遡航しつつ、概況調査を協力的に行い第二期は各専門分野及び分担に従って、独自の行程をたてて調査を行った」とまとめられている。第一期（昭和三年九月～二月）は、トラックやジープに分乗して、タイのバンコクからカンボジアのプノンペン、ラオスのヴィエンチャンからルアンプラバンを経て、北タイのチェンセンに至ったことが記されている。その間は、八幡による「農村技術文化の調査及び資料を蒐集」、長による「標本採集及び栽培方法を調査」、河部による「農村経済の概況及び農村用語の採集」、岩田・綾部による「農村社会構造の概況調査」を行ったと記される。さらに、第一期調査の末期（二月初旬）には、知識整理と調査項目の連絡のため、「ラオ族の農村バン・ノン・ヘオを選定」して全員での調査を一週間行ったこ

とが特徴として記される。その後、第二期(二月)昭和三年三月)は、八幡、長、河部が東北部タイを調査してバンコクに戻った後、中部タイ、東南タイ、南タイの農業技術文化の比較調査(八幡)、バンコクとチェンマイの農事試験場での稲の調査と標本収集(長)、文献・資料収集とカンボジア、北部タイからビルマ領ケン州での農村調査(河部)とそれぞれ個別の調査を行っている。一方で、岩田、綾部はヴィエンチャン附近の「ラオ族農村の集約的調査」を約二ヶ月行った後、ヤオ族の村落に定着した社会調査(岩田)、北タイのチェンマイ近郊のラオ族農村の調査(綾部)を行っている。

(27)「実績報告書」の農学班調査(2)(長)において、タイやカンボジアの農業試験場や農科大学を訪問し、各地で稲作状態を調査し、野生稻などの株や種子を採集したことが記されている。ラオスでも同様に稲作調査を行い、農務局に加え、「USIS, USOMの農業課」といったアメリカの情報機関関連部署も訪問していることが記されている。ルアンプラバンから「船で Mekong を遡航」した際には、両岸の農村調査を行い、陸稲の種子も集めている。その後のバンコクへの帰路においては、東北タイのコラート高原各地の調査、稲作のほか甘蔗や安南人部落の蔬菜の栽培状況も調査し、特にこの年の稲作は「水量不足のため作付不能田多し」と記している。現地では採集した種子はタイの六八種とラオスの九五種に加えて、カンボジアの約二〇〇種も存在していることが記されている。

おわりに

本稿では、神奈川大学日本常民文化研究所に保管されている民族学振興会資料のうち、第一次稲作民族文化総合調査に関連する「趣意書」(一九五七年三月)と「事業実績報告書」(一九五八年四月)に限定して書き起こして紹介するとともに、そこに見られる注目を列挙して整理した。

はじめにでも述べたように、第一次東南アジア稲作調査に関連する振興会の文書資料は、本稿で紹介した二つ以外にも、草稿的な文書も含めて多数存在している。中でも、現地で収集された民具などの収集品目録と、より詳細な個人ごとの調査日程に関する資料は重要な資料と考えられる。

さらに、第一次東南アジア稲作調査の成果として出版された松本信広編「1965」、学会誌『民族学研究』[1968, 1969]における二回の座談会報告のほか、各調査団員による個人研究論文、一般向けの東南アジア稲作民族文化総合調査団編「1969」といった成果報告が存在している。書籍、論文以外の関連成果としては、読売新聞映画班による映画と、日本橋白木屋での文化展という多様なメディアや媒体があり、当時広く公開された。

上記に加えて、第一次東南アジア稲作調査の関連資料としてここで指摘しておきたいのは、調査時に団員がそれぞれ撮影した写真資料が、日本民族学協会から旧文部省史料館を経て、現在は国立民族

學博物館（民博）に數千点ほど保管されていることである。この写真資料のうち、タイの写真資料八〇〇点弱に關しては、民博の「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築に基づく持続發展型人文學研究の推進」プロジェクトの一環として「第一次東南アジア稲作民族文化綜合調査のアーカイブス構築——タイの写真資料を中心に」が現在進められている。⁽²⁷⁾

第一次東南アジア稲作調査の全体像を説明するにあたっては、本稿で紹介した民族學振興會の文書資料に加えて、調査で撮影された写真、民具などの収集品⁽²⁸⁾、成果刊行物、研究論文、一般向けの映画や展示を含めて多様な媒体の資料を総合的に關連づけて検討していく必要があると言えるだろう。本稿の資料紹介はその一端であり、振興會の文書資料に限っても、今回は紹介できなかった収集品目録と詳細な調査日程の文書などが、他の多様な資料と相互参照できるように紹介されるべきものとして残されている。多様な關連資料を地道に紹介し広く公開していくことで、東南アジア稲作調査の全体像と、当時の東南アジア地域に向けられた學術的・一般的な視点を解明する展望が少しずつ開かれてくることを期待したい。

注

- (1) 財団法人民族學振興會編「1984: 13-27」を参照。
- (2) 飯田「2020」、日本文化人類學會ウェブサイト参照。飯田「2020」は、戦前の名称は財団法人民族學協會で、戦後に「日本」の文字が加わり、財団法人日本民族學協會となったと指摘する。

- (3) 中根「1999」、日本文化人類學會ウェブサイト参照。
- (4) 神奈川大学國際常民文化研究機構編「2013, 2015」、神奈川大学日本常民文化研究所ウェブサイト参照。
- (5) 神奈川大学國際常民文化研究機構編「2013, 2015」、泉水「2015」を参照。その他、文書を一枚ずつ撮影した写真データも学会から提供された。

- (6) 財団法人民族學振興會編「1984: 60」の（日本民族學協會）歴代理事長在任期間では、一九五五（昭和三〇）二月～一九六〇（昭和三五）年三月までの理事長を松本信広と記載してあるが、振興會資料にもとづけば、一九五七～五八年の第一次東南アジア稲作調査時における日本民族學協會の理事長は岡正雄で、理事長 岡正雄の名前で文部省への書類が提出されている。
- (7) 残留して調査を続けたのは岩田と綾部の二名で、個別に四月末まで調査を続けた「松本編 1965: ii」。
- (8) 昭和三〇年代の海外學術エクスペディションの展開を整理した飯田「2007: 250」などを参照。
- (9) 振興會資料の中に「日本人の源流を探る——東南アジアの民族文化展（仮称）各種族出品目録」と「民族の河メコン——日本人の源流を探る（解説原稿）」の文書が含まれている。
- (10) その根拠は、「後援会趣意書」の直後に寄付依頼の書面とその領収書などが存在していることである。
- (11) 後援会は、渋沢敬三（國際電信電話株式会社取締役会長）を会長とし、石黒忠篤（參議院議員）、井野硯哉（參議院議員）、植村甲午郎（日本經濟団体連合會副会長）、岡正雄（東京都立大学教授）、佐島

- 敬愛(国際商業会議所日本国内委員会事務総長)、竹村吉右衛門(安田生命保険相互会社取締役社長)、東畑精一(東京大学教授)、花村仁八郎(経済団体連合会事務局次長兼総務部長)、藤山愛一郎(東京商工会議所会頭)、松村謙三(衆議院議員)、矢野一郎(第一生命保険相互会社社長 生命保険協会会長) が名を連ねている。
- (12) 所在地と東京連絡所は具体的な住所と電話番号が記載されているが、ここでは割愛する。
- (13) 以下、原文では罫線を付されていないが、表形式で記載されているものは、罫線を付した形式で見やすく表記した。なお人名や固有名詞について、書類によって異体字で記されているものもあるが、それぞれ原文のままとしている。
- (14) 各班の候補者で、実際に調査に赴いたのは、タイ班の長、八幡、河部、岩田、綾部の五名と、カンボジア班の浅井、松本、浜田、清水の四名である。なおカンボジア班には、本書類に名前が挙げられていない江坂輝弥(慶応大学助手) が考古・歴史班として実際の調査に加わっている。
- (15) 「文政大学」はタマサート大学、「農科大学」はカセサート大学と推測される。
- (16) フランス極東学院(Ecole Française d'Extrême-Orient) のことと推測される。
- (17) 固有農村形態の誤記かと推測される。
- (18) フランス極東学院(Ecole Française d'Extrême-Orient) のことと推測される。
- (19) この書類作成の時点では五月中旬帰国予定と記載されているが、実

際には四月末には残った二名も帰国している[松本編 1965: ii]。この項目の罫線の枠外に「昭和32.8.28. 32.9.13. 32.9.18. 32.9.21. 32.9.25. 昭和32.11.5. 32.11.28. 32.12.23. 32.12.1. 32.12.9」の書き込みメモがそれぞれある。これらは、後日整理のために付けられたメモと推測される。

- (21) タイの政治的な変革とは、一九五七年九月一六日に勃発したサリット・タナラット陸軍司令官によるクーデターを指すと推測される。それまでのビブーン首相はクーデターにより日本へ逃れた。
- (22) ヴィエンチャンの誤記と推測される。
- (23) 2月13日の誤記かと推測される。
- (24) この書類には見え消しの修正が何箇所かほどこされている。
- (25) United States Information Service の略と推測される。
- (26) Unites Sates Operations Mission の略と推測される。
- (27) このプロジェクトに関しては「第一次東南アジア稲作民族文化総合調査のアーカイブス構築——タイの写真資料を中心に」ウェブサイトも参照。
- (28) 当時の調査における民具などの収集品の一部は、保谷にあった日本民族学協会附属民族学博物館から旧文部省史料館を経て、現在は民博に保管されるに至っている[飯田・朝倉編 2017]。

参考文献

浅井恵倫・綾部恒雄・岩田慶治・江坂輝弥・河部利夫・清水潤三・長重九・浜田秀男・松本信広・八幡一郎・宮本延人・白鳥芳郎

1959 「東南アジア稲作民族文化総合調査座談会（その一）」『民族学

研究』第二十二巻第三―四号 日本民族学会。

浅井恵倫・綾部恒雄・岩田慶治・江坂輝弥・河部利夫・清水潤三・長重九・浜田秀男・松本信広・八幡一郎・宮本延人・白鳥芳郎

1959 「東南アジア稲作民族文化総合調査座談会（その二）」『民族学研究』第二十三巻第一―二号 日本民族学会。

飯田卓

2007 「昭和三〇年代の海外学術エクスペディション——『日本の人類学』の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』三一巻二号 国立民族学博物館。

飯田卓

2020 「財団法人日本民族学協会（一九四二年～一九六四年）と附属民族学博物館（一九三七年～一九六二年）——アーカイブズ資料をとおしてその性格をふり返る」『文化人類学』第八五巻第二号 日本文化人類学会。

飯田卓・朝倉敏夫編

2017 『国立民族学博物館調査報告一三九 財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』国立民族学博物館。

神奈川大学国際常民文化研究機構編

2013 『神奈川大学国際常民文化研究叢書四 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』神奈川大学国際常民文化研究機構。

神奈川大学国際常民文化研究機構編

2015 『神奈川大学国際常民文化研究叢書一「民族研究講座」講義録』神奈川大学国際常民文化研究機構。

財団法人民族学振興会編

1964 『財団法人民族学振興会五十年の歩み』財団法人民族学振興会。泉水英計

2015 「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』第五号 神奈川大学国際常民文化研究機構。

東南アジア稲作民族文化総合調査団編

1959 『メコン紀行——民族の源流をたずねて』読売新聞社。

中根千枝

1969 「財団法人民族学振興会の解散について」『民族学研究』第六四巻第三号 日本民族学会。

松本信広編

1965 『インドシナ研究——東南アジア稲作民族文化総合調査報告（一）』有隣堂。

参考ウェブサイト

神奈川大学日本常民文化研究所ウェブサイト「常民研運営資料」
<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/books/folkculture.html>（二〇二三年五月七日閲覧）。

国立民族学博物館ウェブサイト「第一次東南アジア稲作民族文化総合調査のアーカイブス構築——タイの写真資料を中心に」
<https://www.r.mnpku.ac.jp/inasaku-thai/>（二〇二三年五月七日閲覧）。

日本文化人類学会ウェブサイト「日本文化人類学会とは」
<http://www.jasca.org/> (二〇二三年五月七日閲覧)。